

## ネガティブな出来事に対する原因帰属と 特性的自己効力感およびホープレスネスとの関係

三宅 幹子

大学生 236 名を対象に、場面想定法を用いて、ネガティブな出来事に対する原因帰属と、特性的自己効力感、およびホープレスネスとの関係を検討した。分析の結果、男性と女性とでは異なる傾向がみられた。男性においては、特性的自己効力感が低いほど自己保護的な帰属を行う傾向が示された。女性においては、特性的自己効力感が低いほど能力不足を原因と考える傾向がみられた。ホープレスネスと原因帰属との関係は男性においてのみ示され、ホープレスネスが高いほど担当教官へ原因を帰属する傾向がみられた。

[キーワード 原因帰属, 特性的自己効力感, ホープレスネス]

本研究では、大学生を対象に、日常生活で経験するようなネガティブな出来事に対する原因帰属と、特性的自己効力感およびホープレスネスとの関連について検討することを目的とする。

特性的自己効力感 (generalized self-efficacy) とは、具体的な個々の課題や状況に依存せず、より長期的に、より一般化した日常場面における行動に影響する自己効力感のことであり (成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田, 1995), 人格特性的な認知傾向と考えられている。これまでも、特性的自己効力感の高さによって原因帰属に違いがみられることについては、場面想定法を用いたネガティブ場面の提示により明らかにしてきた。三宅 (2000) においては、Table 1 に示す場面を用いて、自己効力感の高い人ほどネガティブ場面の原因を、努力不足、取り組み方の悪さにより強く帰属し、運、担当教官、課題には帰属しにくい傾向があることを示した。さらに、今後、提示したネガティブ場面と同様の状況に直面したら、その際にはどの程度うまくやれるか (課題 (状況) 固有の自己効力感) を問うと、特性的自己効力感の高い人ほどうまくやれるであろうと感じていた。これより、特性的自己効力感と原因帰属の関係について、特性的自己効力感の高い人は、ネガティブな出来事を統制可能な要因に帰属することで将来の期待を低めない帰属様式を有していると解釈している。これについて本研究では、三宅 (2000) において検討した6つの要因 (努力, 取り組み方, 能力, 課題, 運, 担当教官) から、扱う帰属因をさらに増やして、より幅広く検討することとする。

一方、ホープレスネスとは、将来への否定的な期待 (negative expectancies about the

future) のことであり (田中, 1999), 抑うつ生起の重要な原因と考えられている。 hopeless ness とネガティブな出来事に対する原因帰属との関連を検討することにより, 将来への否定的な期待を抱く傾向と関係の深い帰属因を明らかにする。

ネガティブな出来事に対する原因帰属には, 状況的要因のみならず, これらの個人特性による影響がみられると考えられる。本研究では, 個人特性として, 特性的自己効力感と hopeless ness の2つを取り上げ, これらの個人特性と, 場面想定法により提示されたネガティブな出来事の原因をどのような帰属因にもとめるかとの関連について明らかにすることを目的とする。

## 方法

### 調査参加者

地方私立大学大学生 236 名 (平均年齢は 20.1 歳) が調査に参加した。

### 調査の実施方法

無記名式の質問紙形式の調査を講義時間中に集団で実施した。調査は 2007 年の 2 月 (108 名に実施) と 2007 年の 10 月 (128 名に実施) に行い, 所要時間は約 10 分間であった。

### 質問紙の構成

質問紙の構成は, ネガティブな出来事を説明する文章とその場面についての評定項目 (原因帰属, 対処方法, 課題固有の自己効力感, 出来事の重要性) からなる場面想定法 1 セット, および, 特性的自己効力感尺度, Beck Hopelessness Scale 日本語版であった。それぞれ, 以下のようになっていた。

**ネガティブな出来事を説明する文章とその場面についての評定項目** 大学生が日常生活において経験する可能性の高いネガティブな出来事として, 重要なレポートに低い評価をつけられる場面 (Table 1 に示す) を文章で提示し, 自分がこの場面に直面していることを想定しながら読み, その後に続く原因帰属, 対処方法, 課題固有の自己効力感, 出来事の重要性のそれぞれの評定項目への評定を求めた。

**原因帰属の評定項目** Hayamizu (1997), 荒木 (2000), 荒木・大橋 (2001) を参考に, 「①能力が足りなかった」, 「②努力が足りなかった」, 「③自分にとってはレポートの課題が難しかった」, 「④運が悪かった」, 「⑤レポートへの取り組み方が悪かった」, 「⑥担当教官が悪かった」, 「⑦レポートのテーマに対する興味がなかった」, 「⑧体調が悪かった」, 「⑨時間が足りなかった」, 「⑩やる気がでなかった」の 10 項目を提示し, 場面のようになった原因としてそれらの項目がそれぞれどの程度影響していると思うか, 「非常に影響している(5)」から「全く影響していない(1)」までの 5 件法で評定を求めた。

**対処方法の評定項目** Hayamizu (1997) を参考に, 「①なにか, 気晴らしになることを

## ネガティブな出来事に対する原因帰属と特性的自己効力感およびホープレスネスとの関係

する」, 「②次回のレポートが課されたら, レポートをしあげるのに, 今回よりもっと努力することにする」, 「③今後, このようなレポートが課される講義は, なるべく選択しないようにする」, 「④次回のレポートにはどう取り組んだらいいか, 対策を良く考える」, 「⑤評価が低かった理由をはっきりさせようとする」, 「⑥嫌なことなので, あまり深く考えないようにする」の6項目を提示し, 「非常にそう思う(5)」から「全くそう思う(1)」までの5件法で評定を求めた。①, ③, ⑥は比較的消極的な対処方法であり, ②, ④, ⑤は比較的積極的な対処方法である。

**課題固有の自己効力感の評定項目** 説明文のような場面について, 「次回また, 同じようなレポートが課されたら, あなたはうまくやれると思いますか」との項目に, 「非常にそう思う(5)」から「全くそう思わない(1)」までの5件法で評定を求めた。将来, 同様の場面に直面した際にどの程度うまくやれると思うかを問う項目である。

**出来事の重要性の評定項目** 提示した場面について, 「どの程度深刻であると思いますか」との項目に, 「非常にそう思う(5)」から「全くそう思わない(1)」までの5件法で評定を求めた。

Table 1 場面想定法で用いた, ネガティブな出来事を説明する文章

---

必修の授業の成績に影響する重要なレポートが返却された。自分のレポートの評価は低く“C”であった。まわりの友達もほとんど“A”であり, 彼らの評価と比べてみても, 自分のレポートの評価は, かなり低かった。

---

**特性的自己効力感尺度** 成田ら(1995)による特性的自己効力感尺度23項目を特性的自己効力感の測定に用いた。「そう思う(5)」から「そう思わない(1)」までの5段階で評定を求め, 特性的自己効力感が高いほど高得点となるように集計した。

**Beck Hopelessness Scale 日本語版** Beck, Weissman, Lester, & Trexler (1974)によるBeck Hopelessness Scale (BHS)の日本語版20項目。尺度項目は菅原(2001)より引用した。「はい」と「いいえ」の2件法で評定を求め, ホープレスネスが高いほど高得点となるように集計した。

## 結果と考察

各評定値は, 厳密には順序尺度上の数値であるが, 以下では, 便宜的に間隔尺度上の数値とみなして分析を行う。また, 調査参加者236名のうち, 出来事の重要性の評定項目で「わりとそう思う(3)」以上に評定した181名(男性128名, 女性53名)のデータを抽出して,

これ以降の分析の対象とした。

原因帰属の各項目評定値と、特性的自己効力感、課題固有の自己効力感、ホープレスネスのそれぞれとのピアソンの積率相関係数を算出したところ、男性と女性とでは異なる傾向がみられたため、男女別に結果を示す。まず、男女別の各変数の評定値の平均値と性差の検定 (*t* 検定) 結果をTable 2に、男性における変数間の相関係数をTable 3に、そして、女性における変数間の相関係数をTable 4に示す。

Table 2に示す性差については、まず、原因帰属では「時間」と「やる気」において有意な差 (5%水準) がみられ、いずれも女性のほうが強く帰属していた。また「取り組み方」においても女性のほうが強く帰属する傾向がみられた。一方、「運」においてのみ、男性のほうが強く帰属する傾向がみられた。これらの結果から、失敗経験などのネガティブな出来事の原因を内的、安定的、全体的な原因 (例えば、能力不足) に求める“負の帰属スタイル” (Abramson, Seligman, & Teasdale, 1978) には、一般的にみて性差があるとはいえないと考えられる。不安定な要因のうち、何を原因として重くみるかに性差があったといえよう。

加えて、ホープレスネスにも性差がみられ、女性のほうが高かった。これについては、性差はみとめられていない (菅原, 2001) との報告もあり、さらなる検討が必要であろう。

Table 2 性別にみた各評定値の平均値 (*SD*)

	男性 ( <i>n</i> =128)		女性 ( <i>n</i> =53)		性差の検定結果
	平均値	( <i>SD</i> )	平均値	( <i>SD</i> )	( <i>t</i> 検定)
原因帰属					
①能力	3.4	(1.0)	3.6	(1.1)	1.09
②努力	4.1	(0.9)	4.1	(0.8)	0.24
③課題	3.0	(1.1)	3.2	(1.1)	1.17
④運	2.3	(1.3)	1.9	(1.1)	1.84 †
⑤取り組み方	3.9	(0.9)	4.2	(0.8)	1.93 †
⑥担当教官	2.5	(1.1)	2.5	(1.2)	0.01
⑦興味	3.3	(1.1)	3.1	(1.0)	1.43
⑧体調	2.2	(1.1)	2.4	(1.0)	1.32
⑨時間	2.7	(1.2)	3.3	(1.1)	3.36 *
⑩やる気	3.4	(1.2)	3.9	(1.0)	2.34 *
課題固有の自己効力感	3.2	(1.1)	3.0	(1.0)	1.32
特性的自己効力感	70.2	(12.5)	66.7	(14.9)	1.59
ホープレスネス	8.4	(4.6)	9.9	(4.4)	2.02 *

注. 各評定値のレンジは、原因帰属と課題固有の自己効力感は1~5、特性的自己効力感は23~115、ホープレスネスは0~20である。\*  $p < .05$ , †  $p < .10$ .

## ネガティブな出来事に対する原因帰属と特性的自己効力感およびホープレスネスとの関係

Table 3に示す男性における変数間の相関係数については、まず、特性的自己効力感との間に有意な相関がみられた帰属因は、「課題」、「担当教官」、「体調」、「時間」であり、いずれも負の数値であることから、特性的自己効力感が低いほど強く帰属していた。同様に、有意水準には達していないものの、「興味」、「やる気」においても特性的自己効力感が低いほど強く帰属する傾向がみられた。また、課題固有の自己効力感も「体調」「取り組み方」を除き、特性的自己効力感とそれほど大きな違いはなかった。

一方、ホープレスネスとの間に有意な相関がみられた帰属因は、「担当教官」であり、ホープレスネスの程度が高いほど「担当教官」への帰属が強いことが示された。また、有意水準には達しないものの、ホープレスネスの程度が高いほど「努力」には帰属しない傾向があることが示された。

なお、課題固有の自己効力感、特性的自己効力感、ホープレスネスの間の相関係数については、特性的自己効力感と課題固有の自己効力感との間には中程度の正の相関、特性的自己効力感とホープレスネスの間には中程度の負の相関、ホープレスネスと課題固有の自己効力感の間には、やや低めの正の相関がみられた。ホープレスネスは、特性的自己効力感とも課題固有の自己効力感とも負の相関がみられたが、課題固有の自己効力感になると、状況や課題の特殊性が加味される分、関連が薄くなるものと解釈できる。

Table 3 男性における、ネガティブな出来事に対する原因帰属と自己効力感、ホープレスネスとの間の相関係数 ( $n=128$ )

	課題固有の自己効力感	特性的自己効力感	ホープレスネス
原因帰属			
①能力	.04	-.12	.02
②努力	.16	.04	-.15 †
③課題	-.19 *	-.28 *	.12
④運	-.14	-.06	.04
⑤取り組み方	.20 *	.03	-.05
⑥担当教官	-.19 *	-.22 *	.21 *
⑦興味	-.17 †	-.15 †	.14
⑧体調	-.09	-.26 *	.05
⑨時間	-.16 †	-.18 *	.14
⑩やる気	-.11	-.18 †	.07
課題固有の自己効力感	—	.50 *	-.38 *
特性的自己効力感	—	—	-.59 *

\*  $p < .05$ , †  $p < .10$ .

Table 4に示す女性における変数間の相関係数については、まず、特性的自己効力感との間に有意な相関がみられた帰属因は、「能力」、「課題」であり、いずれも負の数値であることから、特性的自己効力感が低いほど強く帰属していた。また、課題固有の自己効力感については「体調」のみと有意な正の相関がみられており、特性的自己効力感とは異なる結果となった。

一方、ホープレスネスとの間に有意な相関がみられた帰属因はみあたらない。

なお、課題固有の自己効力感、特性的自己効力感、ホープレスネスの間の相関係数については、特性的自己効力感と課題固有の自己効力感との間には低い正の相関、特性的自己効力感とホープレスネスの間には中程度の負の相関、ホープレスネスと課題固有の自己効力感の間には、有意な相関はみられなかった。男性の結果と比較すると、課題固有の自己効力感、特性的自己効力感ともホープレスネスとも比較的関連が弱いことから、女性においては、状況や課題の特殊性が加味される比重がより大きく、比較的状况や課題に応じた判断をする傾向があると解釈することができよう。

Table 4 女性における、ネガティブな出来事に対する原因帰属と自己効力感、ホープレスネスとの間の相関係数 (n=53)

	課題固有の自己効力感	特性的自己効力感	ホープレスネス
原因帰属			
①能力	-.04	-.46 *	.22
②努力	-.17	-.04	-.09
③課題	.07	-.31 *	.10
④運	.02	.02	-.00
⑤取り組み方	.03	-.03	.11
⑥担当教官	.14	-.00	-.17
⑦興味	.14	.07	-.02
⑧体調	.47 *	.11	-.08
⑨時間	.15	-.15	.11
⑩やる気	.00	-.19	.08
課題固有の自己効力感	—	.28 *	-.19
特性的自己効力感	—	—	-.55 *

\*  $p < .05$ , †  $p < .10$ .

## ネガティブな出来事に対する原因帰属と特性的自己効力感およびホープレスネスとの関係

上述した結果から、ネガティブな出来事に対する原因帰属と特性的自己効力感との関係についてまとめると、特性的自己効力感が高いほど、男性では「課題」、「担当教官」、「体調」、「時間」には帰属しないことが、また女性では「能力」「課題」には帰属しないことが示された。特性的自己効力感が高いほど「課題」、「担当教官」には帰属しないという結果は、三宅(2000)と一致する部分である。これらの結果のうち、「能力」への帰属に関しては、女性において、失敗経験などのネガティブな出来事の原因を内的、安定的、全体的な原因(例えば、能力不足)に求める“負の帰属スタイル”を特性的自己効力感の低い人ほど持ちやすいと解釈することができる。一方、「課題」、「担当教官」、「体調」、「時間」への帰属については、特性的自己効力感の低い人の方が自己保護的な帰属傾向(自分に都合の良いバイアス(self-serving bias)のうち、失敗に対する自己の責任を否定するバイアス)を持つ傾向が強いと解釈できるのではなかろうか。

また、ネガティブな出来事に対する原因帰属とホープレスネスとの関係についてまとめると、男性においてのみ、ホープレスネスの程度が高いほど「担当教官」への帰属が強いこと、および「努力」には帰属しない傾向が示された。いずれも、次回からの期待を低める可能性のある帰属傾向ではあるが、ホープレスネスと“負の帰属スタイル”の関連は示されなかった。なお、女性に関しては、ホープレスネスと帰属因との関連は示されなかったが、この点については、調査対象人数を増やして再度検討する必要があるといえる。

これらの結果に加えて、課題固有の自己効力感、特性的自己効力感、ホープレスネスとの関係から、課題固有の自己効力感の判断において、女性のほうが状況や課題の特殊性を重視する傾向があることが示された。

最後に、本研究においては学業場面を扱った場面想定法を用いたため、調査対象の学業面への意識の持ち方や取り組み方によっても、結果が異なる可能性が考えられる。本研究では地方私立大学の学生が調査対象となっているが、結果解釈や調査結果の一般化においては、調査参加者の属性に注意する必要があるだろう。

### 引用文献

- Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., & Teasdale, L. D. (1978). Learned helplessness in humans: Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, 87, 49-74.
- 荒木由紀子 (2000). 原因帰属の多様性が学習性無力感に与える効果について 日本教育心理学会第 42 回総会発表論文集, 366.
- 荒木由紀子・大橋智樹 (2001). 中学生における学習性無力感と帰属因の多様性との関連性 日本心理学会第 65 回大会発表論文集, 647.
- Beck, A. T., Weissman, A., Lester, D., & Trexler, L. (1974). The measurement of

### 三宅幹子

pessimism: The hopelessness Scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 861-865.

Hayamizu, T. (1997). Between intrinsic and extrinsic motivation: Examination of reasons for academic study based on the theory of internalization. *Journal of Psychological Research*, 39, 98-108.

三宅幹子 (2000). 特性的自己効力感とネガティブな出来事に対する原因帰属および対処行動 性格心理学研究, 9, 1-10.

成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 (1995). 特性的自己効力感尺度の検討 一生涯発達の利用の可能性を探る一 教育心理学研究, 43, 306-314.

菅原ますみ (2001). ベック絶望感尺度 堀 洋道 (監修)・松井 豊 (編) 心理測定尺度集Ⅲ サイエンス社, pp.159-163.

田中江里子 (1999). ホープレスネスと抑うつとの関連について 日本心理学会第63回大会発表論文集, 733.

**謝辞** 本研究は平成19年度科学研究費補助金(課題番号17730416)の助成を受けて行った。



Relations of causal attribution of a negative event, generalized  
self-efficacy and hopelessness

Motoko MIYAKE

Relations of causal attribution of a negative event and generalized self-efficacy, hopelessness were examined. 236 undergraduates were asked to imagine themselves being faced with a negative event and to rate the likelihood of ten probable causes for it and their self-efficacy to deal with it next time. In addition, they filled the Generalized Self-efficacy Inventory and Beck Hopelessness Scale. Results showed that those whose self-efficacy were lower showed more self-serving bias, and that only in female those whose self-efficacy were lower attribute the negative event more to lack of ability. With regard to hopelessness, only in male, those whose self-efficacy were lower attributed the negative event more to teacher.

[Key words: causal attribution, generalized self-efficacy, hopelessness ]